

マクデブルクのメヒティルト著 『神性の流れる光』の社会的背景 7 －教皇の首位権 (4)－

狩野智洋

1. 序

前稿に於てダマスス 1 世 (Damasus I, 在位 366 - 384) がローマ司教として初めて「マタイによる福音書」第 16 章 18 節を根拠にペトロからの使徒の継承者としてのローマ司教の首位権を明確に主張した事を述べたが、本稿では論を進める前に、ペトロからの使徒の継承の問題に就いて考察しようと思う。¹ 次いで、ペトロを根拠にローマ司教の首位権浸透を図るダマスス 1 世の路線を踏襲する後継司教達について論じたい。

2. ペトロに関する諸問題

2.1. 「マタイによる福音書」第 16 章 18 節に関する諸問題

先ずは「マタイによる福音書」第 16 章 18 節に関して考察する。「マタイによ

1 ペトロについては主に以下の文献に拠った。

Böcher, Otto / Froehlich, Karlfried: Petrus, Apostel. (Böcher: I. Neues Testament. / Froehlich: II. Alte Kirche.) Theologische Realenzyklopädie. Studienausgabe. (以下 TRE と略記) Berlin, New York, 1993-2006. 26, S. 263 - 278. Lampe, Peter / Thümmel, Hans Georg / Hardt, Michael: Petrus. (Lampe: I. Neues Testament. / Thümmel: II. Petrustraditionen. 1 - 3. / Hardt: II. Petrustraditionen. 4.) In: Religion in Geschichte und Gegenwart. Handbuch für Theologie und Religionswissenschaft. Vierte, völlig neu bearbeitete Auflage. Ungekürzte Studienausgabe. (以下 RGG と略記) Tübingen, 2008. 6, Sp. 1160 - 1169. Hödl, Ludwig / Engemann, Josef / Saxer, Victor: Petrus, I. P., Apostel. (Hödl: I. Biblisch-theologisch. / Engemann: II. Ikonographie. / Saxer: III. Kultverbreitung.) In: Lexikon des Mittelalters. Studienausgabe. (以下 LM と略記) Stuttgart, Weimar, 1999. 6, Sp. 1954 - 1958.

る福音書」は「マルコによる福音書」と「ルカによる福音書」と共に同じ資料に基づく共観福音書 (synoptische Evangelien) と呼ばれている。その内、「マルコによる福音書」が最古の福音書で、「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」は現在の形での「マルコによる福音書」に基づき、更にイエスの言葉を集めた語録 (Logienquelle)、所謂 Q 文書 („Q“) を第2資料として用いているという二資料理論 (Zwei-Qellen-Theorie) が現在の定説となっている。² 今後の考察もこの理論に則って行われる。「マルコによる福音書」に基づきながらもマタイとルカはそれぞれの意図を持って福音書を編集している。マタイによる変更や挿入は一貫してペトロの重要性を高めるために行われている事が指摘されている。³

まずは「マタイによる福音書」第16章18節に係わる部分の記述についてそれぞれの共観福音書の該当部分を比較検討したい。「マルコによる福音書」第8章27-30節では該当する箇所は以下のように記されている。

8:27 イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。28 弟子たちは言った。『『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。』29 そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたは

2 共観福音書に就いては主として以下の文献に拠った。

Schnelle, Udo: Synoptische Frage. In: RGG. 7, Sp. 1978 - 1984. Schmithals, Walter: Evangelien, Synoptische. In: TRE. 10, S. 570 - 626.

また、これと関連して聖書の成立に関して以下の文献を参照した。

Wanke, Gunther / Plümacher, Eckhard / Schneemelcher, Wilhelm: Bibel (I - III). (Wanke: I. Die Entstehung des Alten Testaments als Kanon. / Plümacher: II. Die Heiligen Schriften des Judentums im Urchristentum. / Schneemelcher: III. Die Entstehung des Kanons des Neuen Testaments und der christlichen Bibel.) In: TRE. 6, S. 1 - 48. Schnelle, Udo / Fischer, Georg / Becker, Hans-Jürgen / Müller, Hans-Peter / Rydbeck, Lars: Bibel. (Schnelle: I. Zum Begriff, III. Neues Testament 1. - 2. / Fischer: II. Altes Testament 1, 2. b) / Becker: II. Altes Testament 2. / Müller: II. Altes Testament 3. / Rydbeck: III. Neues Testament 3.) In: RGG. 1, Sp. 1407 - 1426.

3 Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S.265f. Lampe, Peter: Petrus. I. Sp. 1161ff.

わたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」
30 するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを
戒められた。⁴

「ルカによる福音書」では次のように記述されている。

9:18 イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちは共にいた。そこで
イエスは、「群衆は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになっ
た。19 弟子たちは答えた。『『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エ
リヤだ』と言う人も、『だれか昔の預言者が生き返ったのだ』と言う人もい
ます。』20 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だ
と言うのか。」ペトロが答えた。「神からのメシアです。」21 イエスは弟子た
ちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、⁵

それに対して「マタイによる福音書」第16章13-20節では以下のようにな
っている。言葉の意味の関わりを明らかにするため、括弧内にギリシア語を補っ
ておく。

16:13 イエスは、フィリポ・カイサリア地方に行ったとき、弟子たちに、「人々
は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。14 弟子た
ちは言った。『『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいま
す。ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。』
15 イエスが言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うの
か。」16 シモン・ペトロが、「あなたはメシア、生ける神の子です」と答え
た。17 すると、イエスはお答えになった。「シモン・バルヨナ、あなたは
幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父

4 共同訳聖書実行委員会：聖書 新共同訳－旧約聖書続編つき 東京 1987/1988. 新約聖書 77 頁。

5 前掲書 新約聖書 122 頁。

なのだ。18 わたしも言うておく。あなたはペトロ (Πέτρος < ὁ πέτρος = 石)。わたしはこの岩 (ἡ πέτρα = 岩) の上にわたしの教会 (ἐκκλησίαν) を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。19 わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」20 それから、イエスは、御自分がメシアであることをだれにも話さないように、と弟子たちに命じられた。⁶

共観福音書相互の比較から「マタイによる福音書」第16章18節を含む17-19節に渡る部分がマタイの編集による追加であることが分かる。

ペトロの本名はシモン (Σίμων シモン)⁷であったが、「マルコによる福音書」と「ルカによる福音書」では十二使徒を選定した際にイエスが彼にペトロ (Πέτρος ペトロス) という名を与えたと記されている。それぞれ「こうして十二人を任命された。シモンにはペトロという名を付けられた」(マコ 3,16)、「それは、イエスがペトロと名付けられたシモン、その兄弟アンデレ、そして、ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、バルトロマイ、」(ルカ 6,14)となっている。一方「マタイによる福音書」では「十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、」(マタ 10,2)と記されており、イエスによる命名とはされていない。

また、共観福音書とは別系統とされる「ヨハネによる福音書」では以下の様に書かれている。ここでも言葉の意味の関わりを明らかにするため、括弧内にギリシア語を補っておく。

1:42 そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ (Κηφᾶς = アラム語の「石」を意味する言葉を音写したもの) — 『岩』 (Πέτρος = 石) という意味

6 前掲書 新約聖書 31-32 頁。

7 Σίμων というギリシア語の名前は、シメオン (Symeon = šim'ôn) と似ている事からユダヤ人には好まれていた。Vgl. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S.264.

— と呼ぶことにする」と言われた。(ヨハ 1,42)⁸

ここで「岩」と訳されている語 „Πέτρος“ の意味は「岩」ではなく「石」であり、音写されたアラム語の意味を説明したものである。従って「岩」ではなく「石」と訳すべきである。⁹ 先に引用した「マタイによる福音書」第16章18節の „Πέτρος (石)“ と „πέτρα (岩)“ の語呂合わせはギリシア語でのみ可能であることが指摘されている¹⁰。

また、最古の文献であるパウロ書簡ではペトロを指す場合に「ガラテアの信徒への手紙」の第2章7節と8節にそれぞれ1度、計2度のみ Πέτρος の語が使われ、その他の場合は Κηφάς が使われている。¹¹

以上の諸点を勘案すると、「マタイによる福音書」第16章17節から20節は史実に基づくのではなく、ギリシア語使用地域での布教が進んだ時期に当該地域に於いて、ペトロの重要性を強調するため、或いはペトロの名の由来を推測

8 共同訳聖書実行委員会：聖書 新約聖書 165 頁。

9 しかし、ドイツ語共同訳でも „Πέτρος“ は „Fels“ (岩) と訳されており、ラテン語訳 (ウルガータ) では単に „Petrus“ となっているが、スロイマーの『教会ラテン語辞典』の Petrus の語源の説明で „(Πέτρος; hebr. (!) : Kepha = Fels)“ と記している。しかし、„Πέτρος“ を「岩」とする誤解が既に長く行われているためであろうか、Liddell & Scott の『希英辞典』の説明ではわざわざ „stone (distd. from πέτρα, q.v.)“ と記して „πέτρος“ と „πέτρα“ の混同を戒めている。

Vgl. Aland, Barbara / Aland, Kurt (Hrsg.) : Das Neue Testament Griechisch und Deutsch. 5., korrigierte Auflage. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 2007. S.250. Aland, Barbara / Aland, Kurt (Hrsg.) : Novum Testamentum Graece et Latine. 3. neu bearbeitete Aufl., 5. Druck. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 2005. S.250. Sleumer, Albert: Kirchenlateinisches Wörterbuch. Unter umfassendster Mitarbeit von Joseph Schmid. Hildesheim · Zürich · New York. 2006. S.600. Liddell, Henry George / Scott, Robert: A Greek-English Lexicon. Revises and augmented throughout by Sir Henry Stuart Jones. With a revised supplement. New York. 1996. S.1398.

10 Vgl. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. Neues Testament. S.265. Lampe, Peter: Petrus. I. Neues Testament. Sp.1162.

11 Vgl. 共同訳聖書実行委員会：聖書 新約聖書 344 頁。S. a. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S.264. ベッヒャーはその理由として、使徒会議で使われていた表現を文字通りに引用したためかも知れない、と述べている。

して¹²、創作された話が採用されたものであると解するのが妥当であろう。この事はまた、ペトロが紀元1世紀の時点で教会にとって比類のない重要性を持った人物であると認識されていたことを示している、と言えよう。¹³

また、「マタイによる福音書」第16章19節ではイエスがペトロに対し「わたしはあなたに天の国の鍵 (κλεῖδας) を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる」と述べているが、同じく「マタイによる福音書」第18章18節では弟子達に対してイエスは「はっきり言っておく。あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれる」¹⁴と述べている。従って、鍵の権限 (clavis) はペトロにのみ与えられたのではなく、使徒全員に与えられたことになる。因みに当該箇所「鍵」はギリシア語では複数形, κλεῖδας であり、ラテン語訳でも複数形, claves となっている。¹⁵ この点を考慮すると第18章18節に係わる伝承が下地にあり、それを元に第16章19節が作られた可能性があると筆者は考える。いずれにしても、現在ではイエスがペトロを最初の教皇に任命したか否かを問う事は時代錯誤とされ¹⁶、ペトロは「最初の教皇 (der „erste Papst“)」などではなく、「使徒達の第一の最も偉大な代表者 (der erste und größte Repräsentant der Apostel)」である¹⁷、と言えよう。

2.2. ペトロのローマでの殉教に関する諸問題

次に、ペトロが皇帝ネロ (Nero, 37 - 68, 在位 54 - 68) によって行われたキリスト教徒迫害の際にローマで処刑されたという伝承に就いて考察したいと思う。

タキトゥス (Cornelius Tacitus, 56 頃 - 120 頃) の「年代記 (Annales)」(XV

12 Vgl. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S.270.

13 Vgl. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S.266. Lampe, a.a.O.

14 Vgl. 共同訳聖書実行委員会：聖書 新約聖書 35 頁。

15 Vgl. Aland, Barbara / Aland, Kurt (Hrsg.) : Novum Testamentum Graece et Latine. S.45.

16 Vgl. Hardt, Michael: Petrus. II. Petrus-traditionen. 4. Sp. 1168.

17 Vgl. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S.270.

44, 2 - 5) (115-17 頃) と、確たる証拠はないが、ローマ司教クレメンス (Clemens Romanus, 在位 92 頃 - 101 頃)¹⁸ によって書かれたとされている「クレメンスの手紙一 (Κλημεντος προς Κορινθιους επιστολη Α')」(5, 1 - 6, 2) (96 頃) から類推されたものである。¹⁹ しかし、「年代記」には、ネロがローマに大火をもたらした放火の罪をローマ市民から憎悪されていたキリスト教徒らに負わせ、残忍極まる方法で処刑したという事が書かれているのみであり、その中にペトロとパウロがいたという事は全く書かれていないし、また、「クレメンスの手紙一」では、ペトロとパウロの殉教に関して専ら抽象的な表現によって記述されているのみであり、具体的な事柄については何も書かれてはおらず、況んやネロによる迫害によって処刑されたとも、ローマで殉教したとも述べられてはいない。²⁰

更には、ルカによって著された「使徒言行録」ではペトロ及びパウロの殉教に関する記述はない。²¹ また、ラインハルトは、西暦 48 年以降のペトロに関して、同時代の資料にはその活動についても死についても何の報告もないまま、1 世紀末に初めて、ペトロがネロの治世にローマで殉教し、更にはローマ教区の長であったとする話が持ち上がった点を指摘した上で、「クレメンスの手紙一」を含め、それ以降に出された各種の「証拠物件 (Beweisstücke)」も現在では、ペトロのローマでの活動を歴史的に証明する資料 (historische Belege) としてはもはや不十分である、と結論づけている。²²

18 クレメンスに就いては以下の文献も参照した。

Powell, Douglas: Clemens von Rom. In: TRE. 8, S. 113 - 120. Lindemann, Andreas: Clemensbriefe. In: RGG. 2, Sp. 397f.

19 Vgl. Tümmel, Hans Georg: Petrus.II. Petrustraditionen. 1. Sp. 1165.

20 Vgl. Tacitus, Cornelius (ed. Fisher, Charls Dennis) : Annales. Oxford, 1906. (<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Tac.+Ann.+15.44&fromdoc=Perseus%3Atext%3A1999.02.0077>) Clemens Romanus (ed. A. Jaubert) : Epistula i ad Corinthios. http://www.documentacatholicaomnia.eu/01p/0088-0097,_SS_Clemens_I,_Epistola_ad_Corinthios_I,_GR.pdf. S.2. 荒井献 編『使徒教父文書』東京 1998 年 86 頁。

21 Vgl. 共同訳聖書実行委員会：聖書 新約聖書 213 頁 - 271 頁。S. a. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S.266.

22 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. Die Geschichte der Päpste. München, 2018. S.24f. その際ラインハルトは、「クレメンスの手紙一」がクレメンスによって書かれたのではなく、ローマ教会の信徒ら

そこで、ペトロの墓と遺骨を求め、1939年から49年及び53年から57年にローマのサン・ピエトロ大聖堂の地下の発掘が行われたが、結局、ペトロの墓や遺骨と同定できるものは発見できなかった。²³

上記の様に、ペトロがローマで司教として活動し、ネロ治下のローマで殉教したという説は極めて疑わしいが、ペトロが十二使徒の代表格であり、伝承を通じて非常に人気が高かったために、ローマ帝国の首都たるローマの教会がその権威を我が物としようとしたと考えられる²⁴。

ところで、既に2世紀には、使徒によって作られた、或いは使徒が最初の司教であった、或いはまた使徒の墓所がある、という歴史的事実や伝承により、本来は全ての教会が同等であったのが、一部の教会が特に尊重され、重視されるようになり、「使徒座 (Sedes Apostolica)」と呼ばれた。²⁵ 使徒座は東方には多数存在したが、西方ではローマ教会が唯一の使徒座であり、西方の諸教会はローマ教会を「自分達の」使徒座と見倣していた。²⁶ そうした中でリヨン司教エイレーナイオス (Ειρηναῖος, 在位 177 - 200 頃) は 185 年頃²⁷ に、異端を反駁する際、教会がイエスから使徒達を経た真理を正統に継承しているとし、特に重要な教会としてローマ教会を例に挙げて、ペトロから当時のローマ司教エレ

によって書かれたと解釈している。S.a. S. 24ff.

また一方では、ネロ治下のローマでのペトロの殉教というストーリーが余程魅力的なのだろうか、従来の説を殆ど無批判に踏襲している研究者もいる。例えばベッヒャーは、総じて厳密に論じているにも拘わらず、事この点に関しては、「クレメンスの手紙一」がネロ治下のローマでのペトロとパウロの殉教を示しているのはほぼ確実であるとし、また、偽書である事を認識し乍らも「ペトロの手紙一」がペトロのローマ滞在を証明していると述べている点等は全く不可解である。Vgl. Böcher, Otto: Petrus, Apostel. I. S. 269, 267.

23 Vgl. Froehlich, Karlfried: Petrus, Apostel. II. S. 276. Thümmel, Hans Georg: Petrus. II. Petrus-traditionen. 2. Sp. 1166. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 25.

24 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S. 24f. Schwaiger, Georg: Papsttum I. Kirchengeschichtlich. In: TRE. 25, S. 647 - 676, hier S. 649f.

25 Vgl. Schwaiger, Georg: Papsttum I. S. 649.

26 Vgl. ebd. S. a. Brennecke, Hans Christof: Papsttum I. Alte Kirche. In: RGG. 6, Sp. 866 - 870, hier Sp. 867.

27 Vgl. Schwaiger, Georg: Papsttum I. S. 648.

ウテロス (Ελεούθερος) に至るまでの司教の系統を記した歴代司教 (教皇) 表 (Bischofsliste, Papstliste) を公表した。²⁸ しかし、ペトロに続くリーヌス (Linus)、クレートゥス (Cletus) 又はアナクレートゥス (Anacletus) 及びクレーマーヌス 1 世 (Clemens I) の最初の 3 名に関しては名前のみで、確たる資料も行跡も残っていないし²⁹、3 世紀迄のローマ司教に関する歴史的検証は不可能となっており³⁰、235 年 9 月 28 日のポンティアヌスの退位がローマ司教に関する最初の確実な事実であり、3、4 世紀になって司教名に添えられた年代は人為によるもので、後の時代の各司教名に関するより詳しい情報は歴史的事実ではないと見做さざるを得ないものである³¹。また、単独司教制が採られるようになったのは 2 世紀以降の事である³² という点からも、歴代司教 (教皇) 表が創作されたものであることはほぼ間違いないと考えられる。

前稿で取り上げたダマスス 1 世 (Damasus I, 在位 366 - 384) の主張もこの様な流れの中にあったのであり、以後もその流れが続く事になる。

3. ダマスス 1 世の継承

3.1. シリキウス

ダマスス 1 世の後更にローマ司教の首位権の主張を進めたのが、後継者シリキウス (Siricius, 在位 384 - 399) であった。シリキウスは最初の教皇による教令 (decretum) を発したとされている。これは 384 (385) 年にスペイン、タラ

28 Vgl. Jaschke, Hans-Jochen: Irenäus von Lyon. In: TRE. 16, . 258 - S. 268, hier S. 260f. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.29.

エイレーナイオスについては次の文献も参照した。

Wyrwa, Dietmar: Irenaeus von Lyon. In: RGG. 4, Sp. 229f. Frank, Karl Suso: Irenaus, 1 .1. v. Lyon. In: LM. 5, Sp. 644.

29 Vgl. Reinhardt, a.a.O.

30 Vgl. Hergemöller, Bernd-Ulrich: Papstnamen, -liste. In: LM. 6, Sp. 1686f., hier Sp. 1686.

31 Vgl. Schwaiger, Georg: Papsttum I. S. 649.

32 Vgl. 狩野智洋 「マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景 4」『言語文化 社会』第 18 号 (学習院大学外国語教育研究センター) 2020 年 1 頁 - 18 頁。該当箇所は 4 頁。

ゴナ (Tarragona) の司教ヒメリウス (Himerius) に宛てた手紙が最初で、西方各地の司教が具体的な規律の問題に関しローマ司教に指示を仰いだ際の回答であり、その対象は当該司教の教区でもあり、また、複数の司教らに宛てた場合はより広範囲の地域でもあった。³³ シリキウスの手紙は、兄弟としての訓戒や教え、慰めの表現が用いられた、彼以前のローマ司教の手紙とは異なり、命令と禁止、非常な仰々しさ、法的な根拠の放棄、といった支配者的表現を特徴としている。³⁴ ここで重要なのは、それまで法的根拠を持つのは教会会議の決定のみであったが、ローマ司教の決定が法的根拠を有することになった点である。³⁵ 以後、ローマ司教 (教皇) による教令が積み重ねられて行く。

3.2. インノケンティウス1世

テオドシウス1世 (Theodosius I, Magnus, 347 - 395, 在位 379 - 395) が395年に没すると、次子アルカディウス (Arcadius, 377頃 - 408, 在位 383 - 408) が東方、その弟ホノリウス (Honorius, 384 - 423, 在位 395 - 423) が西方の統治を受け継ぎ、以後帝国が統一されることはなかった。³⁶ ホノリウスは401年ラヴェンナを西ローマ帝国の首都と定めたが、同年より西ゴートの王アラリック1世 (Alaric I., 370頃 - 410)³⁷ が新たな定住地を求めて度々イタリアに侵入し、テオドシウス1世にアルカディウスとホノリウスを託されたバンダル人將軍スティリコ (Stilicho, 365頃 - 408) が度々撃退するも、408年その謀反を疑ったホノリウスに処刑されると、ローマはアラリック1世によって度々包囲され、410

33 Vgl. Gaudemet, Jean: Kirchenrecht I. Alte Kirche. In: TRE. 18, S.713 - 724, hier S. 719f. May, Georg: Kirchenrechtsquellen I. Katholische. In: TRE. 19, S. 1 - 44, hier S. 3. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.63f.

34 Vgl. Schwaiger, Georg: Papsttum I. S. 651.

35 Vgl. ebd. Gaudemet, Jean: Kirchenrecht I. S. 719. Holze, Heinrich: Siricius. In: RGG. 7, Sp.1351.

36 Vgl. Wirth, Gerhard / Gruber, Joachim: Arcadius. In: LM. 1, Sp. 894f. Klein, Richard: Honorius, I. H., weström. Ks. In: LM. 5, Sp.119. 北原敦 編: イタリア史 (新版 世界各国史 15) 東京 2017年 119頁 - 120頁。

37 ヴィルトは、アラリック1世が後になってから王として言及されるようになったという理由で、彼が王位に就いたという説に疑義を呈している。Vgl. Wirth, Gerhard: Alarich, I. A., westgot. Heerführer. In: LM. 1, Sp. 271

年 8 月 14 日から 3 日 3 晩に渡って略奪された。³⁸

この様な状況下のローマで司教の座にあったのが、インノケンティウス 1 世 (Innocentius I, 401/402 - 417) であった。彼はヒエロニムス (Hieronymus, 340 頃 - 420) の記述により、シリキウスの後任で自らの前任者であるアナスタシウス 1 世 (Anastasius I, 在位 399 - 401/402) の実子であると考えられている。³⁹ アラリック 1 世に包囲されていたローマでは、まだキリスト教に改宗していなかった貴族達はゴート族の侵攻をかつての神々による罰であると考え、神々の好意を取り戻すため、皇帝によって禁じられていた神々への犠牲を包囲されている期間中行いたいと願い、インノケンティウス 1 世はこの異教の儀式が密に行われることを条件に禁令の廃止に同意した。⁴⁰ また、インノケンティウス 1 世は最後の瞬間に自らアラリック 1 世を説得して撤退させようとしたが、失敗に終わった。⁴¹

ダマス 1 世及びシリキウスと同様、インノケンティウス 1 世にとってもローマ司教の首位権が中心的関心事であった。彼はルーアン司教ウィクトリキウス (Victricius, 在位 385 - 410)、トゥールーズ司教エクスペリウス (Exuperius)、グッピオ司教デケンティウス (Decentius) その他の司教らに宛てた教令に於いて、西方の教会規律をローマの範に合わせることを求めた。⁴² ラインハルトに拠るとその根拠は以下のものであった。キリストの為の使徒的、司教的活動は全てペテロから始まったのであり、こうして他の全ての教会はローマ教会に由来し、その存在と精神生活に関しローマ教会からのみ恩恵を被っているのだから、それに報いるためその所有者たるローマ司教に服従する義務を負っ

38 Vgl. Klein, a.a.O. Wirth, a.a.O. Klein, Richard: Stilicho. In: LM. 8, Sp. 184. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.65f. 北原：イタリア史 120 頁。

39 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.65. Wischmeyer, Wolfgang: Innozenz I. In: RGG. 4, Sp. 159f., hier Sp. 159. Schwaiger, Georg: Innozenz, I. I. I., Papst. In: LM. 5, Sp. 433.

40 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.66.

41 Vgl. ebd.

42 Vgl. Schwaiger, a.a.O. Reinhardt, a.a.O.

ている。⁴³ 聖職者の規則、監督、厳格な教導及び改善の名の下にローマ司教がこうして「教会の専制的な法の支配者（[zum] unumschränkten Rechtsherrn der Kirche）」となったのである。⁴⁴

こうして彼は、汚れた人間の行う典礼を無効とした北アフリカの厳格なドナトゥス派⁴⁵や、「神の子」という称号を人としてのイエスにのみ適用し、養子という意味で捉えていたボノス派⁴⁶との論争では最終的な教義の決定権を要求し、また、人間の本質を悪とする説や原罪及びその遺伝による伝達を否定し、罪の無い状態で存在し得る可能性は人間の本質に属し、神の恩恵は、人間の性質を明確に決定する選択の自由を成り立たせて再び獲得させる事にあると主張したペラギウス（Pelagius）⁴⁷とその弟子カエレスティウス（Caelestius）に対する教会会議の決定に介入した。⁴⁸ しかしドナトゥス派及びペラギウスとカエレスティウスとの論争で目覚ましい働きをしたのは、ローマ司教インノケンティウス1世ではなく、北アフリカ、ヒッポの司教アウグスティヌス（Augustinus Hipponensis, 在位 395 - 443）であった。⁴⁹

ところで、同じ頃コンスタンティノポリス総主教は398年より、現在東方教会最高の説教者として見做されている、ヨアンネス・クリュソストモス（Ιωάννης ο Χρυσόστομος, 在位 398 - 403）⁵⁰であったが、彼は熱心に改革を推し進め、381

43 Vgl. Reinhardt, a.a.O.

44 Vgl. ebd.

45 Vgl. Kriegbaum, Bernhard: Donatismus. In: RGG. 2, Sp. 939 - 942. Schindler, Alfred: Donatisten, I. Frühchristentum. In: LM. 3, Sp. 1235f.

46 Vgl. Schäferdiek, Knut: Bonosus/Bonosianer. In: RGG. 1, Sp. 1690.

47 Vgl. Löhr, Winrich: Pelagius/Pelagianer/Semipelagianer, I. Kirchengeschichtlich. In: RGG. 6, Sp. 1081f., hier Sp. 1081. Frank, Karl Suso: Pelagius, 3. P., altkirchl. Theologe. In: LM. 6, Sp. 1860f., hier Sp. 1860. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.68.

48 Vgl. Schwaiger, a.a.O. Wischmeyer, Wolfgang: Innozenz I. Sp. 160.

49 Vgl. Kriegbaum, Bernhard: Donatismus. Sp. 940f. Schindler, Alfred: Donatisten, I. Sp. 1235. Löhr, Winrich: Pelagius/Pelagianer/Semipelagianer, I. Sp. 1081. Frank, Karl Suso: Pelagius, 3. P. Sp. 1860. Reinhardt, a.a.O.

50 ヨアンネス・クリュソストモスに関しては以下の文献を参照した。

Brändle, Rudolf: Johannes Chrysostomos. In: RGG. 4, Sp. 525f. Frank, Karl Suso: Johannes, 82. J.

年の第一コンスタンティノポリス公会議に於いてコンスタンティノポリス教会に認められた東方の各教会に対する裁治権上の最高権を行使しようとして、401年エフェソスで聖職売買によって地位を得た主教らと対立し、また、教会の財政改革、救貧院の設立、マタイによる福音書第25章第31-46節に基づいた貧民救済と富に対する非難によって上流階級と皇后エウドクシア (Εὐδοξία)、更にはまた管区主教ら及びコンスタンティノポリスに定住している修道士らとも対立関係に陥った。402年には、コンスタンティノポリス教会と潜在的に緊張関係にあったアレクサンドリア総主教テオピロス (Θεόφιλος Ἀλεξανδρείας, 在位 385 頃 - 412)⁵¹ が追放したオーリゲネース主義の修道士らを受け入れたため、403年クリュソストモスの反対派と与したテオピロスが議長を務めた「樅の木教会会議」に於いてクリュソストモスは不在のまま断罪され、罷免、追放された。その後間もなく皇后によって追放が解かれたが、その1年後再び、初めアルメニアのクーケーソス (Κουκουσός) (現在のトルコのギョクスン) に追放され、407年次の流謫先ピテュス (Πιττοῦς) (現在のジョージアのピツンダ) に向かう途上で死亡した。

インノケンティウス1世はクリュソストモスの罷免を阻止しようと働き掛けを行ったが失敗に終わり、この介入によってローマとコンスタンティノポリスとの関係は一時断絶した。⁵² 彼はこの後、バルカン半島北西部のイリュリクムをコンスタンティノポリス教会の影響から遠ざけ、ローマにより緊密に結びつけようとして、イリュリクムの管区大司教の権能を拡張することで、テッサロニキに初めてローマ司教代理を置いたが、東方へのローマ司教の影響力を伸張することは殆ど成功しなかった。⁵³

Chrysostomos. In: LM. 5, 563f.

51 テオピロス及び後述の「樅の木教会会議」については以下の文献を参照した。

Kinzig, Wolfram: Theophilus, Patriarch von Alexandrien. In: RGG. 8, Sp. 338f. Grünbeck, Elisabeth: Theophilus, 2. Th., Patriarch v. Alexandria. In: LM. 8, Sp. 665. Stockmeier, Peter: Eichensynode. In: LM. 3, Sp. 1667f.

52 Vgl. Schwaiger, a.a.O. Wischmeyer, a.a.O.

53 Vgl. ebd.

3.3. ケレスティヌス1世

インノケンティウス1世の3代後のケレスティヌス1世 (Coelestinus I, 在位 422 - 432) はローマ教会のみが使徒によって建てられたのであり、他の全ての教区はローマ教会の使者によって設置された、という事実に反するが、当時既に詳細を知る者がいなかったため、強い印象を与えた理屈でローマ司教の首位権を主張し、その影響力を東方へも伸張しようとした。⁵⁴

ケレスティヌス1世は424年、司教らの叙任と罷免を巡る確執が続いていた北アフリカに介入しようとしたが、現地の司教らによってローマ司教への上訴は拒否された。⁵⁵

また、彼はコンスタンティノポリス総主教ネストリオス (Νεστόριος Κωνσταντινούπολης, 在位 428 - 431) とアレクサンドリア総主教キュロス (Κύριλλος Αλεξανδρείας, 在位 412 - 444) の論争に請われて介入することとなったが、その成果を得ることは出来なかった。事の発端はコンスタンティノポリス内での、マリアを「神の母 (Θεοτόκος)」と呼ぶべきか「人の母 (άνθρωποτόκος)」と呼ぶべきかの論争があり、司祭のアナスタシオス (Αναστάσιος) がマリアに対する呼称として「神の母 (Θεοτόκος)」を否定したのに対し、ネストリオスは説教の際に仲裁の目的で新たな呼称「キリストの母 (Χριστοτόκος)」を提示した。⁵⁶ これは彼が教育を受けた、聖書の歴史的語彙の意味を重視し、アレクサンドリア学派が重視する聖書の寓意的解釈がこれと矛盾する場合は寓意的解釈を否定したアンティオキア学派⁵⁷ の考え方に沿ったものであったが、これと対立するアレクサンドリア学派のキュロスがネストリオスを強く批判して論争に加わったことで、事態はコンスタンティノポリスに留ま

54 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.72f.

55 Vgl. Reinhardt, Volker: Pontifex. S.73. Frank, Karl Suso: Coelestin, 1. C. I. In: LM. 3, Sp. 4. Marksches, Christoph: Coelestin I. In: RGG. 2, Sp. 413.

56 Vgl. Mühlberg, Ekkehard: Ephesus, Konzilien. In: RGG. 2, Sp. 1349ff., hier Sp. 1349f. Böhm, Thomas: Nestorianischer Streit. In: RGG. 6, Sp. 202ff., hier Sp. 202f. Stockmeier, Peter: Ephesus, Synoden/Konzilien. In: LM. 3, Sp. 2050ff., hier Sp. 2050f.

57 Vgl. Bruns, Peter: Antiochenische Theologie. In: RGG. 1, Sp. 550f., hier Sp. 550f.

らず、アンティオキア学派とアレクサンドリア学派の論争に、更に、後者の影響を強く受けた⁵⁸ ニカイア信条派のローマ教会・西方教会をも巻き込んだ広範囲な論争に発展した。⁵⁹ キュリロスとネストリオスの要請を受けたケレスティヌス 1 世は 430 年 8 月ローマで教会会議を開いて、論争の詳細は不明なまま、キリストの神性と人性の完全な融合を主張し、ネストリオスの説について、神性と人性を二分割することによって受肉した神性は二個の息子に分割され、マリアの息子は単なる人間になってしまう、と主張するキュリロスの説を是とし、ネストリオスの説を一括して非とし、10 日以内に自説を撤回しない場合はネストリオスを罷免することをキュリロスに依頼した。⁶⁰ キュリロスはネストリオスへの 3 通目の手紙で最後通告として 12 のアナテマ（儀式に則って行われる破門）を提示したが、ネストリオスはこれを拒否した。⁶¹

一方で東ローマ皇帝テオドシウス 2 世 (Theodosius II, 401 - 450, 在位 408 - 450) は教会法の問題とキリスト論に関する教理神学を協議するため⁶²、431 年の聖霊降臨祭に教会会議を行うために東方教会の管区大主教らをエフェソスに招集し、ローマ司教ケレスティヌス 1 世も使節団を派遣した⁶³。ところが、40 人以上の主教及び多数の修道士からなる大規模な一団を引き連れたキュリロスは、到着の遅れていたアンティオキア総主教ヨアンネース 1 世 (Ιωάννης Ι, 在位 429 - 441/442) 率いる東方の代表団とケレスティヌス 1 世の使節団の到着を待たずに、6 月 22 日 150 名以上の参加者と共に、エフェソスの聖マリア教会で教会会議を開いて、ネストリオスに宛てたキュリロスの第 2 の手紙の内容がニカイア信条と一致している事、ネストリオスの返信内容は異端である事が認められ、

58 Vgl. Ritter, Adolf Martin: Alexandrinische Theologie. In: RGG. 1, Sp. 292ff., hier Sp. 293f.

59 Vgl. Mühlenberg, Ekkehard: Ephesus, Konzilien. Sp. 1350. Böhm, Thomas: Nestorianischer Streit. Sp. 203. Stockmeier, Peter: Ephesos, Synoden/Konzilien. Sp. 2051.

60 Vgl. ebd. Vogt, Hermann-Josef: Kyrillos, I. K., Patriarch v. Alexandria. In: LM. 5, Sp. 1599f., hier Sp. 1599.

61 Vgl. Mühlenberg, a.a.O. Böhm, a.a.O. Stockmeier, a.a.O.

62 Vgl. Mühlenberg, Ekkehard: Ephesus, Konzilien. Sp. 1349.

63 Vgl. Stockmeier, a.a.O.

キュリロスの12のアナテマが書かれた3通目の手紙もそのまま承認され、ネストリオスは不在のまま異端としてコンスタンティノポリス総主教の座を追われた。⁶⁴ 7月10(11)日にケレスティヌス1世の使節団が西方の全司教の名でこの決定に同意する事を表明した。⁶⁵ この経過から、ケレスティヌス1世はキュリロスに体よく利用されただけであったと言えよう。⁶⁶

またその一方、ケレスティヌス1世はペラギウス派に対抗するため、429年オーセール司教ゲルマヌス(Germanus Autissiodorensis, 在位418-437/448)をブリタニアへ、431年助祭のパラディウス(Palladius, 在位431-433/434)を初代アイルランド司教としてアイルランドへ派遣した。⁶⁷

4. 結語

本稿で考察した様に、ダマスス1世がローマ司教の首位権の根拠とした「マタイによる福音書」第16章18節は史実に基づかない創作された話が入り入れられたと考えられ、また、ペトロがローマで司教として活動し、ネロ治下のローマで殉教したという説も極めて疑わしいものの、既に詳細を知る者もなく、ペトロに関する各種の伝承もまことしやかに伝えられ、史実でない事柄が恰も史実であるかの様に思い做されて現代に至る迄も伝えられていると言える。更には、西方で唯一の使徒座であり、キリストが誕生した帝国の首都であったローマの教会を権威づけようとして、歴代ローマ司教のみならず、西方教会の司教らもまた、ローマ教会の権威の根拠とするため、ペトロとローマ教会との関係をより確かなものと見せ掛けようとして「伝承」を自ら創作することが行われるようになった。この傾向はこの時代以降も引き継がれて行く。この流れは使徒の継承と言うよりは、ダマスス1世の継承と言っても過言ではあるまい。

64 Vgl. Mühlenberg, Ekkehard: Ephesus, Konzilien. Sp. 1350. Stockmeier, a.a.O. Böhm, a.a.O.

65 Vgl. Mühlenberg, a.a.O. S.a. Reinhardt, a.a.O.

66 Vgl. Frank, a.a.O. Reinhardt, a.a.O.

67 Vgl. Marksches, a.a.O. Frank, a.a.O. Graumann, Thomas: Germanus. In: RGG. 3, Sp. 755. Von Padberg, Lutz E: Palladius, Keltenbischof. In: RGG. 6, Sp. 837f.

マクデブルクのメヒティルト著『神性の流れる光』の社会的背景 7－教皇の首位権 (4)－ (狩野智洋)

しかし、このような試みは必然的に理不尽さを孕んでおり、ローマ教会と同程度のキリスト教史的重要性を有していた使徒座を多数擁する東方教会に容易に受け入れられる筈はなく、ローマ司教の首位権の主張が後に東西教会の教会分裂を必然的に招く事となる。

*本研究は JSPS 科研費 23520393 の助成を受けたものである。

文献表

一次文献

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Nach der Einsiedler Handschrift in kritischem Vergleich mit der gesamten Überlieferung. Hrsg. von Hans Neumann. München / Zürich, 1990.

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Hrsg. von Gisela Vollmann-Profe. Frankfurt/M, 2003.

Mechthild von Magdeburg: Das fließende Licht der Gottheit. Zweite, neubearbeitete Übersetzung mit Einführung und Kommentar von Margot Schmidt. Stuttgart-Bad Cannstatt, 1995.

マクデブルクのメヒティルト (上田兼義 訳): 神性の流れる光 キリスト教神秘主義著作集 第4巻Ⅰ 東京 1996。

マクデブルクのメヒティルト (香田芳樹 訳): 神性の流れる光 ドイツ神秘主義叢書Ⅰ 東京 1999 年。

共同訳聖書実行委員会: 聖書 新共同訳－旧約聖書続編つき 東京 1987/1988。

Aland, Barbara / Aland, Kurt (Hrsg.): Novum Testamentum Graece et Latine. Textum Graecum post Eberhard et Erwin Nestle communiter ediderunt Barbara et Kurt Aland, Johannes Karavidopoulos, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger. Textus Latinus Novae Vulgatae Bibliorum Sacrorum Editioni debetur. Utriusque textus apparatus criticum recensuerunt et editionem novis curis

elaboraverunt Barbara et Kurt Aland una cum Instituto Studiorum Textus Novi Testamenti Monasterii Westphaliae. 3. neu bearbeitete Aufl., 5. Druck. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 2005.

Aland, Barbara / Aland, Kurt (Hrsg.) : Das Neue Testament Griechisch und Deutsch. Griechischer Text: 27. Auflage des Novum Testamentum Graece in der Nachfolge von Eberhard und Ervin Nestle gemeinsam verantwortet von Barbara und Kurt Aland, Johannes Karavidopoulos, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger. Deutsche Texte: Revidierte Fassung der Lutherbibel von 1984 und Einheitsübersetzung der Heiligen Schrift 1979. 5., korrigierte Auflage. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 2007.

二次文献

Krause, Gerhard / Müller, Gerhard (Hrsg.) : Theologische Realenzyklopädie. Studienausgabe. 1-36. Berlin, New York, 1993-2006.

Betz, Hans Dieter / Browning, Don S. / Janowski, Bernd / Jüngel, Eberhard (Hrsg.) : Religion in Geschichte und Gegenwart. Handbuch für Theologie und Religionswissenschaft. Vierte, völlig neu bearbeitete Auflage. Ungekürzte Studienausgabe. Tübingen, 2008.

Avella-Wildhalm, Gloria / Lutz, Liselotte / Mattejiet, Roswitha / Mattejiet, Ulrich (Hrsg.) : Lexikon des Mittelalters. Studienausgabe. 1-9. Stuttgart, Weimar, 1999.

大貫隆 / 名取四郎 / 宮本久雄 / 百瀬文晃 編：キリスト教辞典 東京 2002。

川口洋：キリスト教用語独和小辞典 東京 1996。

今橋朗 / 竹内謙太郎 / 越川弘英 監修：キリスト教礼拝・礼拝学事典 東京 2006。

Ruh, Kurt: Geschichte der abendländischen Mystik. 1 (2., Aufl.) -4. München, 1993-1999 (Bd.2-3) , 2001 (Bd.1.) .

McGinn, Bernard: The presence of God: a history of Western Christian mysticism. 1-3. New York, 1991-1998.

Langer, Otto: Christliche Mystik im Mittelalter. Darmstadt, 2004.

Grundmann, Herbert: Religiöse Bewegungen im Mittelalter. 4., unveränderte Auflage. Reprografischer Nachdruck der 1. Auflage, Berlin 1935 (= Historische Studien, Heft 267) Mit einem Vorwort zum Neudruck 1960 und dem vom Verfasser auf dem Zehnten Internationalen Kongreß der Geschichtswissenschaften, Rom 1955, erstatteten und ergänzten Forschungsbericht „Neue Beiträge zur Geschichte der religiösen Bewegungen im Mittelalter“. Darmstadt, 1977.

Grundmann, Herbert: Ketzergeschichte des Mittelalters. 3., durchgesehene Aufl. In: Die Kirche in ihrer Geschichte. Ein Handbuch herausgegeben von Kurt Dietrich Schmidt und Ernst Wolf Band 2, Lieferung G (1. Teil) Göttingen, 1978.

Balthasar, Hans Urs von (Hrsg.) : Die großen Ordensregeln. 8. Aufl. Einsiedeln, 2010.

Laudage, Johannes / Schrör, Matthias (Hrsg.) : Der Investiturstreit. Quellen und Materialien (Lateinisch - Deutsch) . 2. völlig überarbeitete und stark erweiterte Aufl. Köln, 2006.

Goez, Werner: Kirchenreform und Investiturstreit 910-1122. 2., aktualisierte Auflage. Bearbeitet von Elke Goez. Stuttgart, 2008.

Schieffer, Rudolf: Papst Gregor VII . Kirchenreform und Investiturstreit. München, 2010.

Goez, Elke: Papsttum und Kaisertum im Mittelalter. Darmstadt, 2009.

Zey, Claudia: Der Investiturstreit. München, 2017.

Reinhardt, Volker: Pontifex. Die Geschichte der Päpste. München, 2018.

Gleba, Gudrun: Klosterleben im Mittelalter. Darmstadt, 2004.

Morris, Colin: The Papal Monarchy. The western church from 1050 to 1250. Oxford, 1989, reprinted 2001.

Buttinger, Sabine: Hinter Klostermauern. Darmstadt, 2007.

Lambert, Malcolm: Medieval Heresy : popular movements from the Gregorian reform to the Reformation. 3rd ed. Malden, Oxford, Carlton, 2002.

Kee, Howard Clark : Was wissen wir Jesus? Übersetzt von Ulrike Jung-Grell.

Durchgesehene Ausg. Stuttgart, 1999.

Padberg, Lutz E. von: Die Christianisierung Europas im Mittelalter. - Stuttgart, 1998.

Reichstein, Frank-Michael: Das Beginenwesen in Deutschland : Studien und Katalog. Berlin, 2001.

Simons, Walter: Cities of ladies: Beguine communities in the medieval low countries, 1200-1565. Philadelphia, 2001.

Föbel, Amalie / Hettinger, Anette: Klosterfrauen, Beginen, Ketzerinnen. Religiöse Lebensformen von Frauen im Mittelalter. Idstein, 2000.

Ennen, Edith: Frauen im Mittelalter. 6. Aufl. München, 1999.

Borst, Arno: Lebensformen im Mittelalter. Neuausgabe. 5. Aufl. Berlin, 2010.

Goetz, Hans-Werner: Leben im Mittelalter vom 7. bis zum 13. Jahrhundert. 7. Aufl. München, 2002.

Engel, Evamaria: Die deutsche Stadt im Mittelalter. Düsseldorf, 2005.

Schubert, Ernst: Alltag im Mittelalter. Natürliches Lebensumfeld und menschliches Miteinander. Darmstadt, 2002.

Reinhardt, Volker: Pontifex. Die Geschichte der Päpste. München, 2018.

荒井献 編『使徒教父文書』東京 1998年。

エウセビオス 『教会史』(上下)(秦剛平 訳)東京 2010年。

北原敦 編『イタリア史(新版 世界各国史 15)』東京 2017年。

The social contexts of *The Flowing Light of the Godhead* by Mechthild of Magdeburg (7) – Papal Primacy (4) –

Karino, Toshihiro

Some grounds show that the episode in the Gospel according to St. Matthew 16:18 in which Damasus I claimed the Primacy of the Bishop of Rome is only a fiction imported later into the Bible, and it is very doubtful that St. Peter served as the Bishop of Rome and suffered martyrdom in Neronian Rome. But at that time, no one remained who knew exactly about his acts and death. And so the traditions about St. Peter, regarded as facts, have come down even to the present day. Furthermore, not only the Roman Bishops but also other Bishops in the western part of the Roman Empire began to construct stories, and circulated them as “traditions” in order to establish the authority of the Roman Church, the only one “Sedes Apostolica” in the western part of the Roman Empire, and the church of the capital of the Empire where Jesus Christ was born. This tendency continued ever after.

But as a matter of course, for the bishops of the Eastern Church, with its many Sedes Apostolicas that had the very same importance as the Roman Church, the unreasonable claim for the Primacy of the Bishop of Rome was not acceptable, and the insistence of the Roman Church on this claim would lead to the Schism of the East.

